

我が里海、広島湾の漁業の歴史

中丸可陽

～もくじ～

I、広島湾の特徴

1. その定義
2. 海況

II、広島湾の漁業

1. 海面漁業
2. 海面養殖業
 - *かき養殖業
 - *海苔養殖
 - *ワカメ養殖
 - *真珠養殖

III、広島湾の漁業の歴史

1. 漁場の成り立ち
2. 漁場の消滅
3. 漁業史概要
4. 各漁浦の歴史

はじめに

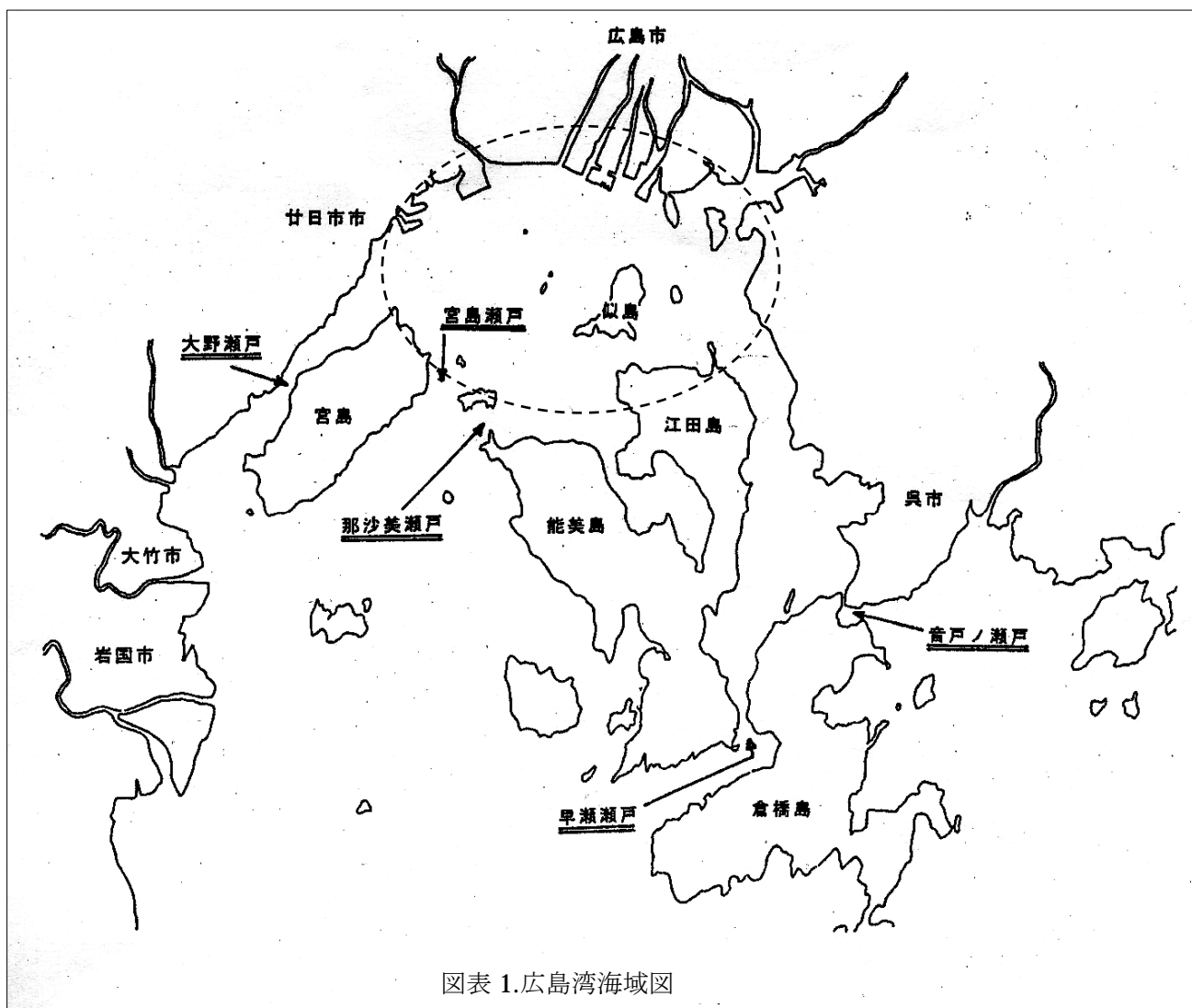
私は広島市の舟入に生まれ、現在は江波に住む 40 歳代の女性である。広島湾岸に生まれ育ち、四十数年経過したが、これまで、我が里海をあまり意識したことはなかった。今回、広島湾についての歴史や現状を、まとめる機会を得た。広島に育った一般の人の感想として、お読みいただくと幸いである。

I、広島湾の特徴

1. 広島湾の定義

一言で広島湾と表現されるがその範囲はどこまでを指すのだろうか。広くは山口県屋代島までを含む海域だとのことだが、ここでは私にとって身近な海、すなわち広島県内に限った狭義の広島湾(=広島湾北部海域とも呼ばれる)を広島湾と呼んで、紹介していきたい。

湾の位置を図表 1 に示す。点線の楕円がここで述べる狭義の広島湾である。



図表 1.広島湾海域図

2. 海況

広島湾の特徴を調べてみた。

* 大部分が水深 10～20mの浅海

大きな輸送船が行き交うのを見るがこれほど浅いというのは意外だ。釣り船に乗って釣りをしたことがあるが、釣り糸の先についた錘が案外簡単に海底まで届いた記憶が思い出される。

* 潮流が緩い

地図(図表 1)を見ると、陸と島に囲まれ、潮の流れを起こしにくいのだろうと想像される。

* 底質の大部分が泥土、西部の沿岸域には一部砂地が存在

泥土がいいのか、砂地が健全なのかもはっきり申し上げてさっぱりわからない。太田川放水路が西部にある関係なのか海流の影響なのか疑問ばかり膨らむ。

* 季節による表面温度差が大きい

潮の流れが緩いということから、海水の対流も起こりにくいのかと想像する。

* 塩分濃度が太田川水系の流量により大きく変化する

太田川水系の河口付近であるので非常に納得できる。牡蠣の養殖などの漁業になんらかの特色を持たせているのだろうか。

こうした特徴を調べてみると、数え切れないほどある全国各地の湾も沿岸部の地形、海底の深さなどによって、それぞれ特色のある海となっているのだろうと理解できる。

Ⅱ、広島湾の漁業

1. 海面漁業

海面漁業とは川ではなく海で営まれる漁業のことである。

広島湾の海面漁業は「沿岸漁業」に分類される。

沿岸漁業とは家族労働を主体とし、日帰りで行われる小規模な漁業のことを言う。経営の殆どは零細な個人経営で行われている。

漁業のピークは概ね昭和 40 年代にピークを迎え、昭和 50 年代前半には最低水準に落ち込んでいる。これは埋め立てによる漁場の消失が影響している。陸地に住む私達は埋め立てで土地が広くなり、恩恵を受けているが失う物があるということも改めて認識しておく必要がある。

2. 海面養殖業

*かき養殖業

平成 19 年(暦年)の広島県全体の生産量は、**19,332** トン(むき身)で日本全体の**58.7%**を占め、現在も、かきは広島の特産物と言える。

しかし、その養殖業者数は昭和 40 年代前半をピークに徐々に減少している。

*海苔養殖

第二次大戦後、新技術の普及により生産量が増大した。

しかし、昭和 40 年代の大規模開発により主力の井口・草津の養殖漁場を消失し、後に経営体数も減少した。

*ワカメ養殖

昭和 38 年に山口県から種糸を試験的に移入して始まり、海苔養殖業の副業として定着した。近年では、新たな特産物として盛んになるつつある。

*真珠養殖

愛媛県宇和島で母貝を購入し、**6~12** 月の間、似島海域において育成、**12~1** 月頃に、再び愛媛県に輸送し、真珠を採取している。

図表 2 に漁業種類別経営体数、図表 3 に主要魚種の漁獲量を示す。

図表2 主とする漁業種類別経営体数

漁業種類 年	海面漁業								海面養殖業						合計	
	小型底曳網	まき網	刺網	釣	延縄	採貝	小型定置網	たこ壺他	小計	カキ	ノリ	真珠	ワカメ	その他		小計
昭和40	27	2	48	122		138	3	81	421	164	562	1	1		728	1149
昭和50	26	1	43	54	5	58	-	64	251	133	75	2	3		211	462
6	18	-	89	148	11	47	-	47	360	82	15	2	1	-	100	460
7	15	-	59	70	11	44	-	29	228	80	26	2	6	-	114	342
8	16	-	62	76	9	44	-	28	235	87	10	2	7	-	106	341

(資料：広島農林水産統計年報)

図表3 主要魚種の漁獲量

単位：トン

区分		年	40	45	50	55	60	3	4	5	6	7	8
魚類	マダイ		0	-	-	1	1	0	1	0	1	1	1
	クロダイ		112	49	12	21	41	70	114	113	122	295	110
	カレイ類		22	58	4	16	29	33	36	38	28	62	29
	スズキ		12	5	3	4	6	12	9	8	12	26	15
	メバル		-	18	1	4	32	55	77	64	55	122	66
	アイナメ		-	-	-	-	8	13	15	25	13	25	13
その他の	タコ		14	12	4	33	12	20	21	27	32	42	22
	クルマエビ		2	0	1	4	1	3	0	0	1	3	1
	ガザミ		2	2	0	6	6	6	3	2	3	22	4
	ナマコ		130	116	175	120	53	58	102	97	93	63	57
	アサリ		1019	1129	556	194	186	31	57	42	56	87	59
	カキ		5707	2743	1338	179	-	-	-	-	-	-	-
計			7020	4132	2094	582	375	301	435	416	416	748	377
総漁獲量			7433	4472	2241	742	473	408	568	517	575	1031	484

*昭和50年以降は、船越・矢野を記す。また、昭和60年以降は五日市を記す。(資料：広島県農林水産統計年報)

Ⅲ、広島湾の漁業の歴史

1. 漁場の成り立ち

太古は、広島市から可部に至る太田川に沿う地区は、殆ど海面であった。図表 4 の元型地線だ。太田川がその河口湾岸にデルタ地帯を形成し、現在の中区・南区・西区は、全てあるいはほとんどが海または島であった。現在の様子からすれば驚くばかりである。そして、住民と言えば、原始的農漁を主体としながら僅かに点在していた程度であったらしい。後に、広島城が築城され、城下町として発展するとともに、漁業も飛躍的に発展してきた。漁場としては以下のような環境から、前述のような漁業・養殖業が発展してきた。

- ・ 太田川からの栄養分豊かな水の供給
これにより植物プランクトンが安定して増殖する。
- ・ 太田川からの土砂の供給
これにより広大な干潟が形成された。

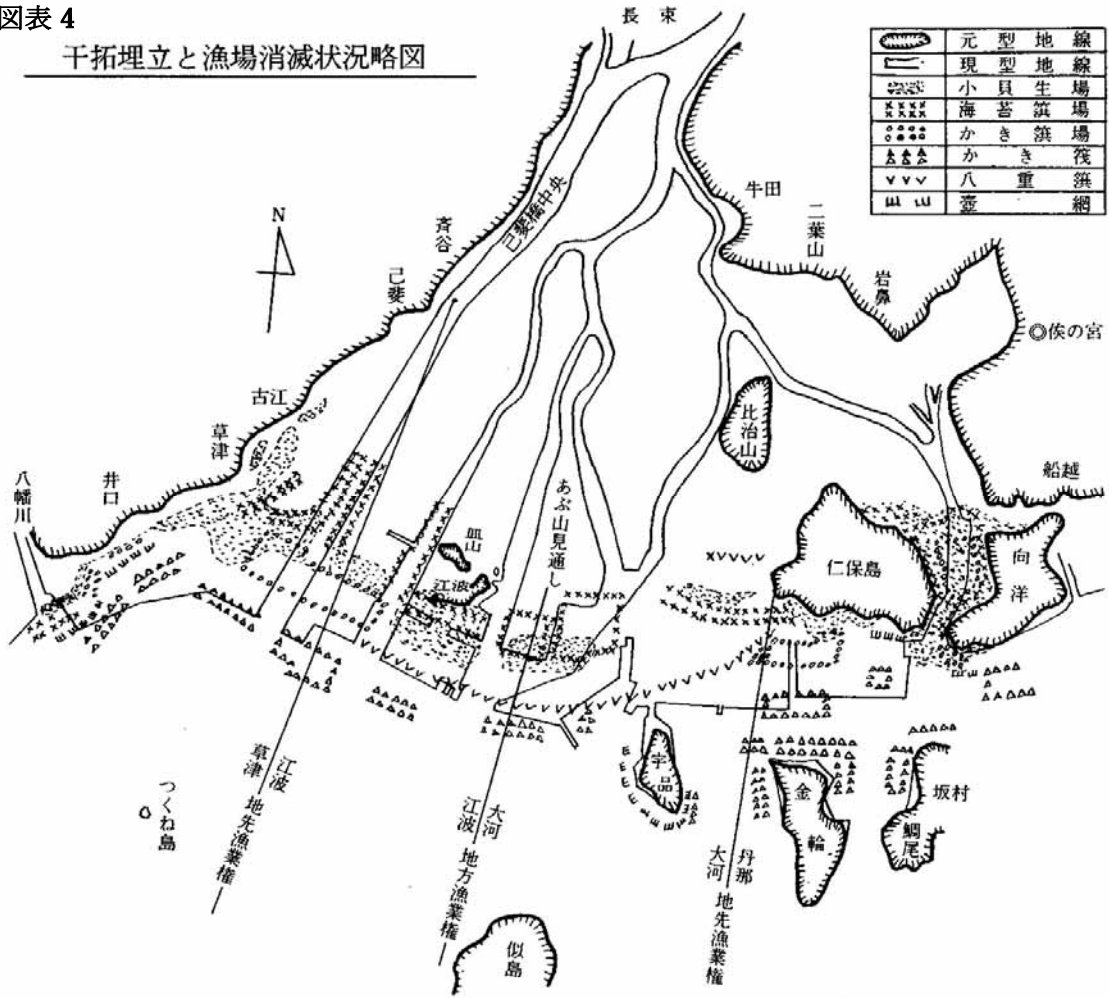
2. 漁場の消滅

明治以降、文化の急速な発展により、好漁場の価値が低下し始めた。そして、人口の増加と、工場進出により、海水汚濁を引き起こし、有害物質が含有するに至る。また、太田川デルタは以下のように埋め立てにより消滅し、漁場も失っていった。

- ・ 宇品港築設
- ・ 昭和新開埋立て
- ・ 猿猴川の河川改修による埋立て
- ・ 広島工業港築設
- ・ 広島市西部開発事業による草津地区埋立て

図表 4 は太田川デルタ地帯の埋め立てと漁場消失の様子である。元漁場と、現在の陸地との関係がよく分かる。

図表 4
干拓埋立と漁場消滅状況略図



3. 漁業史概要

広島の水産物に関する記述がある文書で、一番古いものは「出雲風土記」(713)がある。それ以降、広島城築城までに記されたものは皆無と言って良い。

毛利元就がデルタ地帯を積極的に開拓し始めたことから、漁業史も始まった。従って、その歴史は、僅かに**500年**足らずのものである。広島湾の漁業の変遷を見るため、かき養殖と海苔養殖の歩みを中心とした年表を図表5にまとめた。

城下町として発展させるために人口が集結し、漁業も発展し始めた。かき・海苔も養殖技術が起こり、改良されながら発展を始めた。参勤交代が始まってからは、江戸・浅草で発展した海苔の製法を学ぶなどの他地域との交流も発展に寄与したようである。発展は生産・製法だけではない。すでに江戸時代に入って **100年**も経たないうちに、かき船が大阪で営業を始めるなど販路拡大にも乗り出している。そして江戸時代中期に隆盛期が到来した。

こうした漁業の発展、人口の増大に伴い、土地を必要とすることから干拓も人工的に進められた。広島湾のこの **1000年**は干拓と埋め立ての歴史とも言えるようであるが人口が増え始めたこの頃から加速し始めたようだ。そして、近代から現代に至って大規模に埋め立てが進み、漁場の消滅と衰退に至っている。

図表5 広島湾の漁業

西暦	年号	広島政治情勢など	発達経過	かき	発達経過	海苔	浅草、品川	政治情勢
700		安芸、周防の国境ができる		貞観の君が江波島に来られた時、住民がかきを贈ったとあり				大宝律令(701)正税の代納品目の中の一つに紫菜(いわのり)があった
1000				江波島の住民は、飢饉のためかきを食べ尽くす			古くより簀立漁業、地曳網が行われていた	
1250	正応	武田信光、安芸の守護に(1221) 武田山城下にあゆ築と鞆飼船あり						
1300	文保	佐東八日市より年貢米を船で兵庫へ送る						
1350	正平	不動院建立						
	元徳	武田信宗武田城築城す						
1400								
1450	康正長祿	武田、草津城攻略	自然生ひろい		自然生食時代		浅草でのりが採れていた頃 太田道灌・江戸城時代	
1500	明応	仁保島は白井氏の統治下になる						
	永正	武田、毛利に敗れる	かき時代					
	天文	毛利時代へ(1541)						

← 太田川を利用して舟運が盛ん

住み着く人が増える
魚介の採掘場所となる
農耕地の開墾
砂洲の堆積
太田川からの流砂は堆積して

探貝と徒歩いさり
&
簀建、地曳網
の原始的業業

西暦	年号	広島政治情勢など	発達経過	かき	発達経過	海苔	浅草、品川	政治情勢
1550	慶長	毛利元就 積極的にデルタ開拓 毛利輝元入城(1591)	八重 自然物着生時代	かき養殖法発明	拾いのり 天日		浅草でのりが採れなくなった時代	家康江戸城時代
1600	元和	福島正則入城(1601) 浅野長晟入城(1619)	養蠶法	紀州かきを広島へ移植	素干し時代	大竹の地に海苔場があったらしい	両国橋あたりでのりがとれた時代	江戸参勤交代始まる
1650	寛永 慶安	草津の小西屋五郎八等 かき築研究起す	粗朶・ハチク筭	淵崎平四郎 2年かき 二代平四郎 3年かき養成	粗朶時代	仁保島本浦の人長三郎、半三郎等、粗朶にのり付、えびらのりを製造す 仁保島より干しのりを初めて藩主に献上した	この頃、葛西で拾いのり時代 この頃、浅草紙法によつてのり漉きが創る	江戸参勤交代確立
1700	万治 寛文	草津かき船が大阪で営業開始 ⇒販路拡大	ま竹筭	広島かき養殖始まる	海苔	養え	浅草で紙漉法でのり漉が行われた	
1750	元禄	草津かき船が大阪で営業開始 ⇒販路拡大	かき	草津かき船が大阪で営業開始 ⇒販路拡大	養え	仁保島のり献上		
1750	享保	草津に魚問屋ができる	量産	仁保島のかき船も大阪で営業開始 草津と仁保島のかき船が大阪での営業で争い	殖ら	大河の人両国屋元衛門、藩主に従い江戸に登り浅草のり製法を学ぶ 大河の人、海津屋清蔵により大河潟に海苔場割を始めた 高野山に納めて高野のりの名が残った 江波、柳屋又七等同志、江波潟にのり場開発を創む		
1750	宝暦	藩が貝類をみだりに採ることを禁止する	販路拡大時代	矢野、従来の石付かき法を築建法に改める 日宇那、従来の石付かき法を築建法に改める	法のり	この頃、草津にのり築建を始めた 江波にのり養殖が確立		
1750	明和	藩が貝類をみだりに採ることを禁止する	販路拡大時代	磐城国松川浦へ広島かきを移植	完成時代	二代目又七、えびらのりの製法を改良して名声を博した		
1750	寛政	藩が貝類をみだりに採ることを禁止する	販路拡大時代	磐城国松川浦へ広島かきを移植	完成時代	二代目又七、えびらのりの製法を改良して名声を博した		

現在の白神社岩礁から北方白島付近まで川洲となる

城下町と新開地に、主に関西からの住民の転住が推奨

皆実新開、東雲新開できる
仁保が陸続きとなる

城下町の人口増加に伴い水産物の需要が急増
⇒養殖技術の改良

かき、のり養殖法の完成 & 販路拡大
..... 隆盛期到来

西暦	年号	広島政治情勢など	発達経過	かき	発達経過	海苔	浅草、品川	政治情勢
1800	文化	江波新港修築(1811)	かき 量産 船 販 路 代	丹那にかき床、生場免許 この頃、刈崎藻崎実入場に草津かき仲間株は外出をしていた	漣のり法完成	刈崎の人、蔭屋忠四郎がえびらのりを薄く沸く方法を完成した 江波、三代目又七、江戸に登り浅草のり製法を学ぶ 草津にのり築場ができた	品川で葉付きの竹を建てて、のりをとる	
	文政	丹那かき、のり免許図会						
1850	天保		販 大 時 代		拡大時代	各浦毎に海苔座特権授与 ⇒乾のり製造発展 広島県は東京、横浜にのり製法改良視察員を派遣す		
	嘉永 慶応 明治	広島県勸業報告 宇品港完成(1889)						
1900	大正 昭和	漁業法施行(1902)	拡大時代					
		広島工業港着工(1940) 広島工業港完成(1947)						
1950	昭和		筏式垂下養殖法					
		工業用地造成 西部開発事業						
2000	平成		筏式垂下養殖法					

← 江波村と江波島が陸続きに

← 観音新開できる

← 宇品干拓

デルタの消滅による
漁場の消滅・衰退

← 観音、江波、吉島、千田町の一部を埋立て

← 仁保沖町埋立て
マツダ工場建設

← 商工センターできる

4. 各漁浦の歴史

明治14年捕魚採藻営業取締りのため、県は、数ヶ町村を合わせて組合を結成するように指導し、明治19年には、農商務省と県は漁業組合準則を公布している。

その組成に指導が行なわれ、明治35年漁業法の施行により、いよいよ漁業組合が正式に認可された。

ただし、区割漁業権は、従来から、個人免許が主体であったためかき、海苔業の盛んな地区では、地区漁業組合のうちに別に運営された申し合わせのかき、海苔、小貝組合が存在していた。

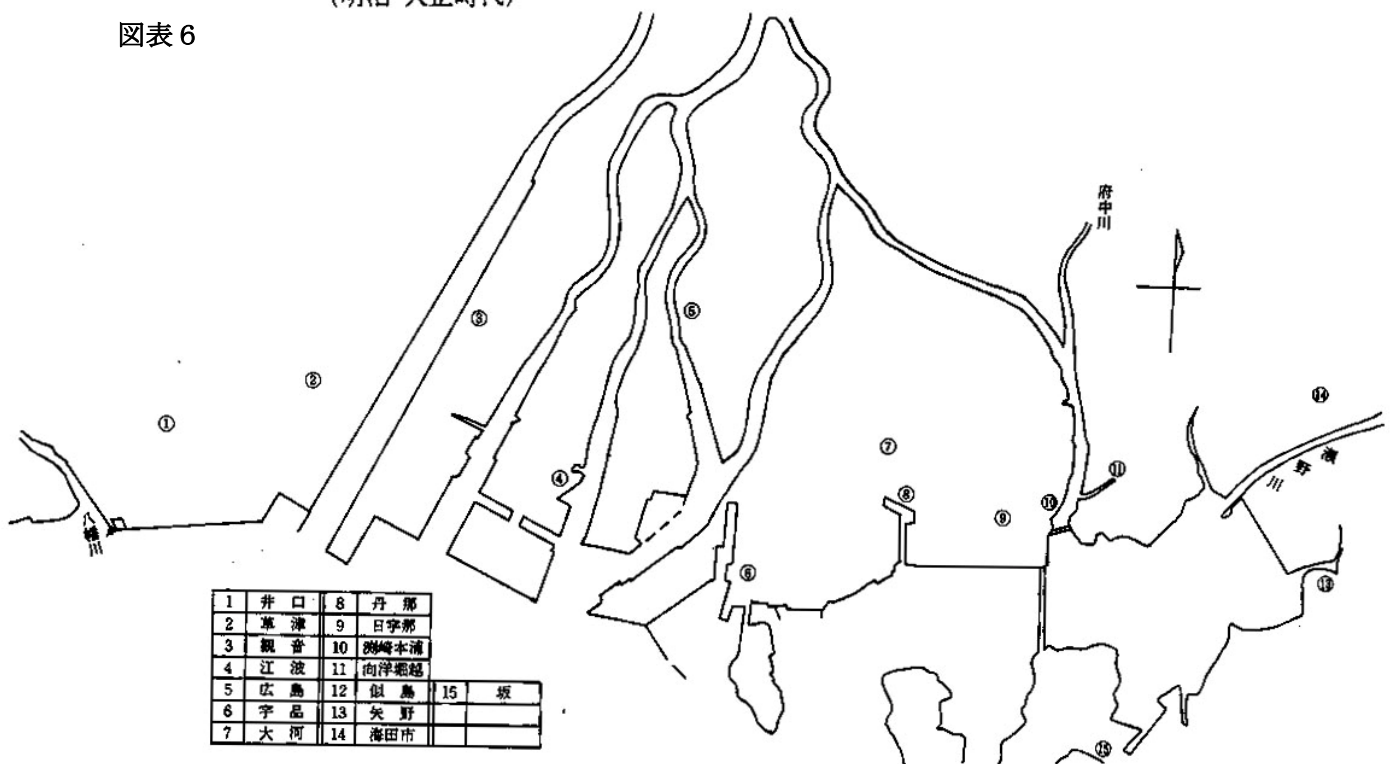
第二次大戦中は、団体統制令によって、在来の個別小組合は、市町村単位に統合されて、単一化されてきた。

終戦後は、個人免許が廃止されて、全て漁業協同組合に優先免許となり漁場の行使は民主的に組合会で決定し、水面利用の合理化を自主的に図るようになった。

図表6に表される広島市各漁浦についての概要を以下に示すことにする。

広島市域に於ける漁浦分布図
(明治・大正時代)

図表6



①井口漁浦・・・昭和24年9月17日 井口漁業協同組合 設立

井之口村は、古くより農業、漁業兼業の村落であり、採貝と一本釣りの自家用程度から始まったものと考えられる。

従来、この地区には漁業者は少なく、そのためか、漁業組合の設立も戦後になって初めて実現した。

広島市西部開発事業が実施され、地先海面は消滅し、僅かに残る海面の利用と漁業の技術的改革を計り、今後の進展を企画中である。

②草津漁浦・・・明治35年9月29日 草津漁業組合 設立

太田川デルタの西側に位置し、発達していた広大な干潟、浅海は古くから、あさり、はまぐり、かき、海苔の増殖と釣餌虫類の繁殖に適していた。各種魚介藻類の産卵と稚魚の成育に恵まれてそれによって魚介の回遊を促し、磯いかり釣漁、地曳網等が発達してきた。草津は、海陸共に交通の要所であり、古い時代から、この利が活かされている。特に広島城が築設されてからは、その発展が著しい。

昔、古江と草津は一つの村落であって、草津は漁業と舟運業が主体であり後方に農耕を主体とする古江田方を抱えていた。

城下町の魚介類需要は、年と共に増大し、漁獲物が草津の浜に集荷されたことから魚市が古くから発達してきた。また、広大な干潟、浅海を活用する貝類と海苔の養殖業が開発されてきた。

特に、大阪登りの安芸国のかき船は天下に有名であり、広島かきを安芸国の名産にした功績は大きい。

また、草津浦に接する観音新開地区の農耕者、および江波島漁民との間に干潟漁業の境界で、度々争いを繰返してきた。

従って、太田川改修、広島工業港、広島空港、次いで西部開発事業による漁場の消滅に対する漁民の反発は格別強固なものがあつた。

特に、西部開発事業は、漁場の全滅を招き、草津浦の漁業史も消し去る悲運を招いた。

③観音新開・・・明治36年4月20日 観音漁業組合 設立

広瀬、観音新開が出来るに従って、移住の農業者が、草津のかき発展や江波の海苔発展に刺激を受け、海面への進出を計ったらしい。昭和の初めに、県の斡旋により、草津、江波の両漁業組合から、かき簀場の一部を譲り受け、初めて地先にかき簀場が出来た。観音地区の漁民の中には、五日市町に転住し、その地でのかき業発展の基礎を造った。

④江波漁浦・・・明治35年9月25日 江波漁業組合 設立

武田山城下、川之内までの漕筋に当たっていて、上り下りの舟が江波山を目安にしていた時代があった筈である。古くから、舟運の要衝点であったと考えられる。広島城築城から、明治22年に宇品港ができるまでの長い間城下町の舟運は水主町を基点とし、江波島の港を外港とした重要な地位を保持してきた。

明和年間(1770年頃)柳屋又七等によって、海苔養殖法が開発された。

接続する干拓地を農作に採り入れた半農半漁の生活時代が江波の安定期として暫く続いた。畑が空く冬には海苔を天日干ししていた。寛永年間(1850年頃)漉き海苔の製造が自由になり、それ以降は江波海苔が大河海苔と共に大発展した。

宇品港築港後は、外港としての地位を譲った。

広島工業港築設のために、江波浦の漁場は全滅したが、戦後は、遠く能美島、倉橋島までかき漁場を求めて行き、再び隆盛期を迎えた。

江波の地名の由来は、江波がまだ島だった頃、エサが肥えており「餌場(えば)」と呼ばれるようになったことからと言われている。

天平年間に奈良朝廷の役人らしい貞親君が、当時、名原島と呼ばれていた江波島を訪れた際、住民からかきを贈られたという伝説がある。

長治2年(1105)稀に見る凶作で、当時、地切島と呼ばれていた江波島の住民はききんのために近くのかきを食べ尽くした。ここで西清八なる人物が窮民に麦三石を与えるとともに、他国より種貝を求めて、増殖を計ったという伝説もある。

⑤広島漁業組合・・・明治36年1月15日 設立

広島市内の河川沿いに居住し、一本釣りを主体とする漁業者で組織された。
広島工業港築設によって、干潟、浅海を奪われ、大戦を境として
組合は自然消滅した。

⑥宇品漁業組合・・・大正12年2月6日 設立

地先漁場は殆どなく、全て他地区組合海区での操業。
隆盛期は宇品港における、ばら撒餌釣であった。
宇品港の拡張、船舶の通航・停泊の増大、水質悪化により、戦後間もなく
消滅した。

宇品の地名は、宇品島(現在の元宇品町)に由来する。

宇品島は、その形状が、牛を伏せたようになっていたことから

「牛ノ島」と呼ばれていたものが「牛奈(うしな)島」→「宇品」となった
説や、「広島港内の港」を意味する「内ノ島」が訛ったという説がある。

⑦似島漁業組合・・・明治36年6月23日 設立

いわし網漁が盛んで、縛り網・あぐり網漁も行われたが、戦後は不漁となり、
かき筏養殖に転じた。現在は広島市漁業協同組合似島地区となっている。

江戸時代には、荷継ぎの港として栄え「荷の島」と呼ばれていたが

これは広島湾が遠浅で大きな船舶が岸まで入れなかったため、一旦、似島に
荷を降ろし、そこから小さな船で本州へ運んでいたことによる。

後に、「富士山に似た山のある島」から来か「似島」の表記が定着する。

⑧大河漁浦・・・明治35年12月18日 大河漁業組合 設立

この地のいわし漁は古く初めは地曳網で獲ったと伝承される。
いわし船曳網が盛んとなった頃は8統の網があった。

釣りも仁保島の中で一番盛んな時代があり、特に鱈の漕釣りは得意で
釣り船は150隻もあって、餌はいわし網で捕れた生いわしであった。

海苔養殖は享保年間に江戸から浅草海苔の製造法を学び帰ったように
盛んであった。

この地区は城下町に近いことから古くから魚商人がいた。広島市南区北大河町
の大教寺の前通りは露店が並んで賑やかな市が形成されていたようである。

この地区の漁民には厚い信仰があった。大河地藏尊の御本尊は海上で拾い上げ
た香木を供養したことから始まり、火災の難を免れたことから信仰を集めた。
また、地区の家々から集めたお米で作った団子は病気や海難を免れる御利益が
あると信仰された。

総じて、大河浦は海苔養殖を主体としつつ農業も兼ね、魚商も発達してきた。
しかし、宇品港築設に伴い漁業を放棄して転業を余儀なくされて行った。
昭和15年の広島工業港築設によっては全ての漁場を失った。

⑨丹那漁浦・・・明治36年5月26日 丹那漁業組合 設立

この地の昔の干潟は魚介藻類が豊富で、徒渉いさり漁から船いさり漁へと
発展していた。

1662年からの皆実新開の築設で大漁場が消滅した。
1889年の宇品築港とその新開によってたくさんの八重簀や磯漁が消滅し、
丹那漁業組合はかきを主体とする組合となった。

⑩日宇那漁浦・・・明治35年 日宇那漁業組合 設立

この浦は約250年前、高台に初めて人家ができたらしい。広島城建設後、漁家が海岸を埋立てながら増加し、明治6年頃115戸の住家があった。

明治6年3月築造の石碑がある日宇那港はその費用は全て日宇那漁民の寄付によって完成した。

操業は網漁業の発達に伴い、広い海域にわたり、沖合専用漁業権を獲得していった。

戦後、日宇那地先の海面が埋め立てられ、この漁浦の姿は消滅した。

⑪浜崎・本浦漁浦・・・明治35年11月26日 浜崎本浦漁業組合 設立

この地域のかき・海苔の養殖は古くから原始的養殖法が存在していたようであり、その発祥の地と言われる。

浅野藩政下となってから改良・発達をみている。

草津に次いで大阪で営業を始めたかき船は本浦の人が始め、周辺の浜崎や向洋のかき船に替わっていったという。

⑫向洋、堀越漁浦

この地域は農地に恵まれ農業が主体であったが、農作不振や対岸浜崎の養殖業に刺激され、海苔・かきの養殖が発達した。

約180年前には対馬の海に出漁、次いで朝鮮海まで出漁した時代があり、外海出漁に先鞭をつけた。

昭和10年代に入り、広島工業港築設に伴う猿猴川の大改修・埋立てにより、干潟、漁場を一気に失い、衰退した。

終わりに

私が生まれ育った広島湾について、発展の経過を調べてここにまとめてみたわけであるが広島湾はこれまで変わり続けてきたことがよく分かった。

地形も産業も生活も変わって時代を作ってきた。

そして、最近の出島の埋め立てはオンタイムで知るところであり、今後も広島湾は変わっていくのだろうと思う。

調べるにあたり、瀬戸内里海振興会より資料を拝借した。

また、広島市公文書館、郷土資料館、公民館などにこうした地域密着の資料が先人の努力で調査・作成され、蔵書されていることもわかった。

地域から恩恵を受けて育ってきた者として、できることは限られるが、まずは歴史や現況を知り、周囲や子供へ伝えていくことが大切なことと思う。

参考資料

広島太田川デルタの漁業史（川上 雅之 著）

常設展示「広島カキ養殖」（広島市郷土資料館）

年表「太田川と広島湾の漁業のあゆみ」（広島市水産振興センター）

広島市の水産業（広島市）